

物か日記

三篇

八遠13  
962  
8



門遠 13  
號 162  
卷 8



朝顔日記卷之六 故芝叟遺話

十三回 関

柳浪



名妓紅拂の李衛公の英雄と鑒佳人鶯々ハ張君瑞  
が才情と憐ふ私奔私約の醜態ハ渡莫兩個一貫たる  
その氣列ハともて白璧の微瑕ハ掩足るん宮城阿蕪次郎  
由ありて駒澤の家督と継次郎左衛門と名と更めたる秋  
月が妻水青ハ勿論女深雪ハ此ありしとい夢小たも知ず駒  
沢ハ別人まると心得一心誓て異夫ハ見へじと遂小其家出  
亡それより回戸が舎止らまてハ鍼の席坐し或ハ亡八  
が院幽らまて火災の臺在が幾十の艱苦と嘗悉

安正和保 卷六

おろくに今ハ憂身と捨果て。世ハ又怖るべきものハなけれど、  
渡海の泛宅ニ坐て、亡頼者の觸犯と豫避、夜ハ終夜寝  
も寐らまらず。名たる播州難ハ半百里程の大津なる小候も  
秋已ハ果とまれば、風いよく烈しく、況て前程ハ鳴門の奔潮盤  
渦出、看々濤起て山の如く、船と蕩颺汰敷、つ凡庸の婦  
おとせれば、隨即眩暈つべし。さる小深雪ハ端然と危坐て顔  
色も變てぞ在ける。いつり高砂の浦畔と後よかし、明石の  
峽戸と過又来方の想きて、いとくその人と春戀と只管神  
馳し、ぐや、都の天の近きたるぞ樂し、死を水送山流て、  
蘆ガ散浪速の港へぞ着にける。かくて深雪ハ浪花ととち出難ぬく  
帝都ニ歩着て、嬉の余旅疲をへいとす。疾や遅と紫陌ニ入や

いる。居趾ハふらず。只宮城阿蘇次郎が僑居ハと。雲擢む  
やうに尋ね捜せば、速うは知るべうもぬし。看すく、人も  
晩たまハ、只得先斗町の逆旅店ニ歇宿と占。自来盤纏  
とて準備せざる由へあるほどの隨身衣と活代なして、日  
の費用とす。いつと阿蘇次郎ニ遇さへとも。自在とこ  
るふと、高と括り。果ハ襲までも。驚盡せしと不論好  
反さて其寓居と漸下河原まで。尋ねあたらしうと。今下ハ  
あらぬ票札ニ替てあまける由へ。唐突とも叫門し、かく  
貼壁の賣烟舗たちよきて阿蘇次郎が下落と問ふ。店  
小二が着實隣家ニ宮城阿蘇次郎殿として學問の師  
範と做人のいせい。が。何事のあまけん。近曾遠ニ中國

阿蘇次郎 巻二

下らまるとり。その後、鎌倉に住きて、今ハ声價人ふ  
て在せるよし。ある書生衆より、傳承まハるよしとい  
ける。深雪ハ聞よ、阿と叫び、忽地仆伏て。半响昏暈  
り。ふまを看より、對門隔壁より、人影集合。顔ハ水う、灌  
ぬどけまば、ごかくして、徐々小變。人々ハ烟鋪より、動  
静を聞て、ごかくと哀まが、多方と懃ハ、扶持原来宮  
城氏ハ由縁の人まら。宮城氏鎌倉ハ在すよ。ハ吾曹ハ  
仄聽とべしぬ。さもあらば、早く鎌倉へ下て、對面め、鎌  
倉といへ、向なるやうぬまど。行程僅ハ十日餘とそつふる。  
ごふか、心怯おハしてハ、獨行のかど、放心不下おハ、氣  
的實ハ脩たまへと、着カてハ、懇ハ懃アける。何處の浦

おも、夜又ハぬけまど。分て、都下ハ人の心も優しく仁け  
あて、那の官道とちけバ、日の岡の到下ぬ。そまより  
山科とつ地方を經て、大津とつ驛舎あり。今日ハまど日  
も高けまバ、大津までハ容易往せたまへ。ぬんど問ぬ  
ふとさへ、いひの、まら。深雪ハや、人心地つとて、都人の好意と  
感激。ヤグて杖ハ、技らまて、蹴揚の阪と躋り、燒ガ懷と過  
り、湖水も些見えて、渺々たる水光天ハ接して、凛烈し  
げま。深雪ハ、猛然とかり、やと。ふまより、さきの東路ハ  
行程かと、向なるふ。いつり衣裳も、沽却て、裂縫片衣一套  
憂身と掩。その項の寒氣肌肉を侵し、心地ま、例さら

ず且這里までの一路も京へとへ着たまは情即小遇々  
 ひとと、ふまをとの頼来て幾許の艱苦と嘗しよその人  
 今ハ在さどして鶏ガ鳴東の天は在とと聞はどく精カ  
 と脱し、往つ還まつ風痴のおとく獨躊躇邊は、閑の  
 清水も墜紅も埋もも神の檜垣より人葛も色ハ世  
 一霜枯ふ、とりふ返曠の影残る、對山の門まる間  
 よ、一陣の朔風吹嵐て、草穿の骨髓は冷徹をバ遍身  
 たちまら粟粒もこそ、そのまゝ寒戦ぎおほえず咬牙と  
 さへあしつた、右顧ても左顧ても子然たる一身かるふ  
 かく俄は寒邪は冒とまで煩燥く、心細きことつゝとらうり  
 ねし、今ハ一步もとむるあといはず、只得あひの夜一夜

泣あうりけるが、曉うると風をこり志りて、疎雨のやう  
 まふと出るよ、まと一層の愁とまゝ、泣く宮居の廡下ま  
 て匍匐ゆきて、残喘もはきあへずぞあはける、あひの朝まどた  
 小驛の里正等幹あてて経過し、返臥せる人の啼く  
 声、いと不そくたるは、草葉およはる虫の音よもまがへる  
 と聞咎て立ちまゝ、但見をば、いと痛たけぬる未通女の  
 いたく窶とて、身よ一套の襤褸と纏ひ、戦栗居をる  
 顔の小廝が荷たる諸葛菜の葉よ、青くさし果敢  
 ぬけふる舉動ふるふ、ふうく憐悶と催し、夥伴のものども  
 小うち語りひ、這の病女はかく負窶しくあはたきと、加  
 端の賤からぬ、いへうさま由ある人の果あらん、さても痛し

こゆとこせ  
深雪襲とわうて  
海道へ流落



心ふりきこ

ゆめあ

所を

あや

か白の花の

いと〜あか

高三隆連



さふとふあらずやと。即便袋よ。丸薬かどころで、是を  
飲しむまば。土人どもい。やぐて熱き白粥まで拿未たうべ  
とせつ。里正いまと土人等と商議この處はあやしの黄土  
小屋と修ひ。藁の席と敷せ。稻巻ふどして。卧たる上と  
覆ひて。いさうり寒冷と凌せける。交加の人ひまをとりいれ  
と。一錢二錢と去りて過けるとかや。深雪ハ阿蕪次郎と暮  
あま。日ハ終日。夜終夜流涕焦泣ほど。遂ハ両眼泣潰。  
今ハ蟬丸の因果と惹て。俄亡目とぬ果ハ哀といふも惹う  
なり。まゝろふ一身の病毒銀海ハ凝磊ハゆへや。半月をうり  
志て軀ハ健ふか。四肢の屈伸も自由ぎまけり。さきいかく  
他郷ハ流落。刺膝容るむり。その小屋ハ起臥ふせまたと

何ハ譬人。さきバ由縁の方よりして。去と問あまこ人しぬし。  
故園の記念。伴いともれり。天虚ゆく月日のとまりし  
と。これと。拜ままぬ身とぬて。夜あらぬども野于玉  
の暗路と迷ふとびり。さふ。た。音信るものとしてハ。馬驅丁ハ  
唄からね。松吹風。潮のかげとの響のそ。ある時ハ。筑紫鴻  
の父母と戀ひ。ある時ハ。吾孀ら可憐郎と想ひ。屈してこ  
居たまける。忽日ま。父老ども来りて。深雪ハ。對ひ  
り。やう。嚮の日女の惱ふり。こ。時熱ハ犯されて  
の讒語。あはま。早く鎌倉ハ下て。こ。即ハ遇まは  
し。と。幾十回。い。は。また。そ。ハ。真情ハ。侍。や。と。問ひ  
けま。ハ。深雪。應て。声。り。さ。も。こ。い。ハ。小。も。こ。が。郎。ハ。東。方

五五五  
五五五

五五五

の天ふときくからよ、尋ね遇んと歩来て、あらうや  
病寒、おの路上よのたふし、不意目りの見えぬ身と  
ふらぬ、あつあつとどおのたやと、命のかぎを精かきま  
神佛の眞助とたのえ、環會とたもひてづる、尚あのみこ  
よ結果まば遊魂とたあしも下らで、あつとつ、父老  
いへらく、ともあら、伎よ、什店を習熟りまたる伎倆ハ  
あらどるや、深雪ハ聞てうち黙頭、既然さらう、三絃子と  
彈會しへる、父老ハ己がさうろふ合へる臉して、好く三  
絃とさへ彈ままば、鎌倉へ下らう、小いよき飯資おま  
とて、己いちかぢらで、驛中と暮、五錢七錢聚めり、  
やがて二貫むうふどたておける、父老ハおの錢子もて

骨董舗よ、一張の檜柄三絃を買得て、深雪よあなへ  
いと、まを弾て、何ふとも曲子と唱ひ、此むりてかとも  
纏頭と得て、まをともて路費と、一驛一驛と驛送よ  
鎌倉へ下らまよといと、深切な教導ける、這ハ父老も  
ま、得かたき奇特のものよどあまける、深雪ハま  
より、父老等が好意を嬉し、いごさらば、おの三絃を彈  
て、東海道と下らんと、沉思よ、まかく瞎眼と、お、小た  
まば、今や即又會面とも、極めてまこと、い認たま、い、さ  
あま、那方よも記得ある、朝顔の曲子と唱よ、まら、い、こ  
袖ハ不覺な滴せる、露の乾る間の、舞の萎めるむら、こや  
つきて、憂身と照す日影さへ見る由も、ま、干隔湯

ついでに、憂身と照す日影さへ見る由も、ま、干隔湯

〇七



女たゞ羞澁と難面と涙まどらす疎雨のそらくとま  
もふまかしと操ふる三線の愛惜と夫戀鹿の鳴音より  
哀情ふくむる声口よハ聞人おと感耐霽は咽ふ黄  
鸝は優る如陵頻伽よも劣いせいと唄とくいひさび  
ほどよ。那方這方よもてこやととて露むうてよハあ  
まど恵この纏頭の員副ていまハ綴補かまど新し夾  
紫とすら襲。餘寒を凌ぐ便ともかまふと。さて這の  
深雪が。往先くの土人ども。深雪が真の名をちりねハ  
只朝顔くくといひ噓不と只これ。朝顔の嬰と喚做し  
て。海道筋よその名高とさふへける。まど朝顔が經  
過ところの驛く朝貞の曲子大ハ流行。狗うつ黄口兒

いさらふもいとず。乾菜葉とどむ飯盛婢も。殺鬼春  
喫無籍漢まで。あの曲子と唱和。門く巷くハ。ふとが為  
ふかーがまー。

十四回川

あの春ハ羽林大内介多々良満興殿。幕府の御休暇と賜  
さま本領周防の山口へ赴任せらる。寵臣駒澤次郎左  
衛門御前驅たるふよ。騎長岩代瀑布太と同道して殿  
よ。三日先だち。鎌倉表と起行け。行ハ程暇く業平  
の中將の鹿の子まだらと咏せ玉ひ。富士の山脚ぬ  
駿河の府中ふぞ着きふける。駒澤も今ハ大藩の國老格  
おまハ。その行装いと美々かき。本陣ハ駒澤が定

の 朝 門 朝 鳳 見



の 安 右 衛 門 卷 上

の 安 右 衛 門 卷 上

の 九

長崎の町に  
 住む人々の  
 生活の様子  
 を描いた  
 物語の一場  
 である。

紋の幕と張。泊札高ヤリと建かきて。玄關前ハ砂子堆く  
 盛あげ。そのこころ水うち灌ぎ。亭長ハ麻社祢うち着て。  
 恭しく候迎ぬ。駒澤次郎左衛門正廳上と。バ。亭長が奔  
 走大くおらず。次郎左衛門やがて。亭長ハ宿資とこら  
 せぬ。かくて次郎左衛門ハ浴室と出リ。一盞茶時湯氣お  
 解し居て。堅右と看よいと新ぬる矮屏風。志ぶく可  
 賞ぬら一ひらの色紙と貼交へてありける。と。ほくく讀  
 下せば。己一年兔道の螢狩の舟よて。深雪が握扇よ寫て  
 やりたる。朝顔の唱歌よてありける。バ。次郎左衛門ふくく  
 不審く。右思左想。那の同舟の伴ふらで。出るべうもぬ  
 き去の唱歌。誰水莖の痕うらねど。斯處よて見んとハ  
 料らごまると。と。ふりく放心不下。バ。そのまう掌と拍引  
 客女と呼よせ。かの色紙と指點。まハ何等の人の寫たる  
 小。伎ハあらずやと問け。バ。引客女應へて。ふの屏風ハ  
 漸ちりきころ。裝飾てまゐり侍る。御尋りる地紙の文字  
 ハ朝顔の流行曲子なるよ。弊宅の兒輩の寫字師  
 よ。寫て飽らまると。亭長のまうと。や。承い。て。鎌  
 倉よ。い。い。ま。ど。薺の曲子ハ時行まうさずや。這里等の  
 驛くハ。頬よ。あ。の。曲。子。と。も。て。難。し。む。く。ほ。け。か。る。馬。子  
 ごと。こ。ら。唱。ひ。あ。ご。を。侍。る。ふ。と。つ。ふ。次。郎。左。衛。門。ハ。其。ま。ま  
 眉と八字よ。お。一。そ。ハ。ま。ま。何。如。か。る。縁。故。小。よ。り。時。行  
 出。せ。い。ど。と。い。く。恠。め。ら。面。も。ち。せ。る。ふ。ど。引。客。女。つ。い

日本書紀  
 卷一

やう、さまはその事よしべり。其の頃朝顔と喚ませる。十  
七八むりの美しき藝妓東の方へたづねる人のあるして、  
畿内よそらごそ来その薺の曲子と三線子ふかけ  
て。いと有趣唱ひ侍る。始めハ花子のぶとき風状よりだ  
今ハその藝の庇よて張三李四よそもてしやとてや  
時りき、おとまの驛よ留りらきて居る。客官ふも召れ  
て聞せたまはる。御慰鬱小もね侍らんと勸ぬ。次郎  
左衛門聞うちよそも驚悸ぎ。何とねく肚裏よや徹けん  
さらばいらしやく聴まわしと。同歌せー瀑布太小對ひて。  
あまと議よ。瀑布太も。今宵いここと徒然かまをハ一  
段よりめと諾まひけるゆへ。そのま引客女は吩咐て。い  
そぎかの盲女と招き来らしむ。時じくりありて。宿の  
下從が朝顔が泰てさうらふといひつぎ。藝が手とひき来  
て。縁席布たる階除よ坐せしめぬ。藝ハまをばらけよ  
跪だき。低頭して礼とふせる。その舉動臙氣ふらぬハ  
次郎九衛門ハ燭の火影また一目着て。原来深雪の  
果ふるりと。肝にぶきたる這方よハ。藝ハ律呂を調せつ  
聴賓客とこが郎とい。神からぬ身のえもあらで。操を初る  
憂身よし。虫々知すとつふものねらん。只何とねくうちふれ  
ねのつらねる涙声小て。  
あまのひろろのちとがほとてら。次郎うげのほまふきよあにれ  
一村とりのとらしとふまわしと。ねー反く悲壮くも彈死

新古今和歌集

唱心い空よ吾嬬ねる。夫と想ふ想夫憐。夫の春雄ハ  
偷眼よ。看とバ見るほどうたがひねき。とら妻ふらう痛しや  
世よ亡人とおもひし。かくも寡きて存命ありし。見  
當初ハ花やく容貌いと窈窕。媚きつると。今ハ周る朝  
顔の露と帯とる愁眉涙睫。とまふうくもねもひとくら  
で。水人して舊の名を告とて。いハ。あよねき過百千回悔  
ても還らず。妹ハとまどとあらぬも道理。明石の浦の盟  
とたぐへず。とがためお節とたて。家と逃とて飄零来没秋  
波とまでおきたるハ。極つてあま哀慕のほもたる殃よヤ  
あらん。可憐妹が情貞やと。骨髓ハ徹ゆる憂悲。と  
心胞絡と白刃もて剛くよ。堪がたく。みほと涙洒ハ泉の

おとく。声ハ吞まむ泣顔と。岩代ハ見らる。と。扇ハ  
掩翳背向。廣坐稠人も。と。あらず。涕うちかきて黙  
志たる。瀑布太ハ一個鉄腸漢。嬖り方と斜硯て。勞仕  
ふてありき。唱ごまの殊勝と。伊勢の海席田よ。ハ。今  
うきて有趣。と。き。今一曲と所望ける。と。次郎左衛門ハ  
あまを止り。纏頭と與へて退り。む。瀑布太ハ執事ハ恃  
か。と。く。いと敗興氣の嘴臉。と。り。次郎左衛門ハ適間よ。と  
胸うちほぶきて。悲歎のあま。ふた。び。聴。と。ま。の。び。の。強  
て瀑布太ハ攔止し。ね。かくて次郎左衛門ハ夜深人靜  
と候て。又も前の引客女とまねき。仔細あま。バ。甲夜の朝  
顔とやらんと。密。と。あ。を。へ。呼。よ。せ。ん。を。よ。と。た。の。と。け。を。ハ。

襲めこころは  
 朝顔の曲子  
 とらたつ次郎  
 左衛門これと  
 聞ておぼろ  
 哀憐と催す



○安右加保  
 卷六

〇十三



○安右加保  
 卷六

〇十二

引客女ハ心ヲ得て。そのまゝ人ヲ走らせけり。使  
廻りてつゝやう。朝顔が宿より来りす。比先清水と  
つゝ在處の饗筵ふよむきて。迎轎に乗てとく往きし  
ハ。今夜ハ那方ハ宿歇やもらん。天明でハ歸来す  
ましまし。このよと聞。次郎左衛門深望とう。かひ海  
月の骨と遇としもぬく。いとほおぬく想屈ま。人志  
をす嗟歎煩悶と甲斐ふ。次郎左衛門例五更起  
行のまふまを。夜間ハ朝顔はあふまとかまはず。瀑  
布太が嫌疑かりませ。計較万種もあらんとおしへ  
と。今ハ何ともせんをべかく。ほねハ肌身と離れし  
妹が記念の扇をとるで。亭長と呼よせて。此一

たる縁故のあまを。あの扇子ハ宵の婆よとけられ  
と。まゝ別ハ一襲の金子と副。諄く托とて通與され  
亭長。あまを収手。慎てその托意と畏れぬ。亭長  
ハ二位の客官と送。まだ夜ハあけぬまねども。また  
朝顔ハ何くまをと憚りて。己の下刻ハやうく出来  
亭長ハ對て昨日の謝と叙。朝まだきよ。呼び  
来。たまたまハ底事の在。けりうと。あや。む。亭長  
いへらく。別の事。ふもあらど。甲夜の貴客の御托。て  
あまを。汝ハ羞。くまよ。一柄の扇子と。一封の金子  
とを遺。り。あ。ま。た。ま。し。そのま。手。通。し。ま。ま。朝。顔。ハ

肩かたが頓ひたり、ままははふふりり。故ゆゑなき御方おんかたよよ。かくかく沉重ちゆうじゆうなる  
 金子かねこ賜たまふふべき覺おぼえとべべらずずと數回あまたま扇子せんしとと拾ひつつままははし  
 撫なつつここととりりつつててああままけけるるがが。ややととららそそのの扇あふぎ子こととここしし出い！  
 家公だんぬの扇あふぎと見みてたたままははまま。倘もしや葬おさなと挿さめめてて、その  
 側うらままここららハハガガははねねよよ唱なひひ侍まるる。唱な歌うたとと寫かててハハああららごごるるやや。  
 とことこここれれくくつつよよ。亭長あやとハハ眼め鏡がととううけけ、その扇あふぎ子こととひひら  
 と見みて。正ただ是これくくいいととるるおおとと一ひと輪りんの葬おさなの花はなの畫ゑよ露つゆ  
 のひひるるままがが寫かててああるるハハああままと聞きよよ。朝顔あさがおハハおおけけええず  
 吻くちと長なが大だい息いきつつく。亭長あやとハハ扇あふぎととううちちくくつつ見みて、朝顔あさがお殿どの  
 ままごご何なにの寫かててああるるよ。朝顔あさがおいいとと慌あわてて、何なにおおとと寫かて  
 ああららんとと。ままろろハハいいくくもも躑あよよまま。亭長あやとハハ扇あふぎの裏書うら

叔お誦そ宮城みやぎ阿あ蕪わ次じ郎らう事こと。駒澤こまざわ次じ郎らう左衛門さゑもんと記ししてあり  
 原もと來こ駒澤こまざわ殿どのハハ舊もと宮城みやぎ何なに某なにかと申ませせしし人ひとおおととと  
 いいひひも果はぬぬよ。朝顔あさがおハハ呆おろままどどひひおおももいいどどし展轉あしま  
 人目ひとめととも羞はずずとと乱みだしてして。身みハハ空蟬うつせみの蛻ぬ売うししどどく  
 什な夜よ宮城みやぎ阿あ蕪わ次じ郎らうとと駒澤こまざわ次じ郎らう左衛門さゑもんととやや、それそれを  
 ととごご尋たづねねたたるる人ひとふふまま。南無なむ三寶さんぼう遅おそかかてて。いていて庁時ていじもも  
 ややく追おひひつつんとと。足あしも空うつらよよ驅かいいどどすすと。亭長あやとハハややががててひひき  
 ととごごめめ。そのややううよよ焦燥しゆうそうたたまま入いるる。ああまままままま慌あてて急いががまま  
 ば、蹶けつきてて恠が我がももややととららん。駒澤こまざわどのハハ五更ごせい起行だちゆのこと  
 かかままば、逆さかも急いよよ追おつつととかかたたしし。殊ことよよいいの大おほ雨あめよよいいつつて  
 途みちも歩あららるるべべきき。ささハハああまませせひひよよ往ゆふふととふふららばばああままと着き



往 ちやまと。簾と笠と把て廻せば。朝顔ハ涙と流し辱  
形しとそのやうら着て。杖とたのそふたどくま。西  
の方へといそだけ。心ハ飛と脚果敢どらず。雨ハます  
く降まき。宛も篠とほくおとく。斜風ハ衣服と  
濕腐し。辛くて大井川ハ歩りほけバ。悲し。大鼓  
打鳴して。只今川苗をぬとのありさハ。深雪ハ已で  
氣疲足癢て。去と聞よ。身も世もあらず。大内  
家の御藩中。駒澤次郎左衛門殿ハ何如小と問。問屋  
場の者ども。そハ今一時むら。先ハ川と越たま。うど  
いふまど。岸うつ浪のよるべく。松よふ。鳥のたのとも  
たえ。おほえず大地ハ打坐。躑躅して。悔めと詮ぬく。  
たぐ声ハ放ちて。位叫ぶよ。刺さへ笠と。ハ川風ハ吹

こらきて。

十五回 豹

駒澤次郎左衛門春雄ハ。大井川ハ渡りて。大小天  
龍ハさらぬ。一路些の川沮ぬ。刺連日天暗して。曉  
起ち晩ハ歇。程ぬく帝京ハちづき。草津の驛ハ  
まだ夜深ハ出で。午の貝吹頃ハ山科ハいた。所謂  
奴茶屋ハ少憩とぬ。爾時一個の乞丐ガ。たこ  
たる声して。常盤の州ハ。山鰻鱺と。唄ひほく蛇と  
使。銭子を。次郎左衛門。隔隙ハ。透看。白齒  
者。棚倉忠吾と。呼ひうち耳語。また蕎子ハ。堅て也

の巻加保 巻六

く、行おと二里むかひ、いと冷静き古刹のあるところ  
て、篝かたてさせ、筑八と跟方よ従うへ、門より入  
来りて閑玩ける。おの處ハ伏水の六地藏として、  
の昔小野篁冥府へ往還せしといへる古跡あり。  
忠吾ハこや弄蛇を兒と將て、僻處の花の下に  
せて待居たり。次郎左衛門ちりづきよきて、足下  
ハ橘雞菴よあらざるや。別来ハ久違たりとついに、  
雞菴頭と搢て、おもと者まば、鳥金和絹よ大内  
家の唐菱の紋と染ぬきたる小袖と着し、一様外  
套とうち穿て、茶苧の袴と跨美と盡せる大小刀  
と佩たるが、いと堂くげぬる武夫かた。おもと則ら

當初の宮城阿蘇次郎よてありける由へ治、その最早  
く発跡しと羨ま、且巳が飄零たるとうち羞遊ハと  
應へて俯伏ふけるその状、髪ハ五六寸生長て、剛力なり  
たまご、些の力もかけぬ見えて、身ハ海松のぶとき  
一套の藍縷とまとひ、潮沾まとまていと浅間し、次  
郎左衛門ハ跟隨を遠ざけ、その身縁故ありて、駒沢の  
祖業を襲、今ハ大夫の列よも加はり、おもとと、またハ  
不思議の因よよきて、秋月弓之助とも縁者とおぼ  
し、が往年足下の計ひよて、種々の齟齬などあり  
たるおとと聞し、君子ハその罪を悪んでその  
人と悪まざるといへり。我いさくも哀よ介むおと

あなたも  
と進んで  
井川



井川

井川

七

あらず。我初浪くの身ふり時足下の涯き好意  
奴兼侍てきと袂よ一包的金子とと出し。  
こハ些少おまども。露とりその謝意と表すねえ。  
と手自迎興。如何おまどとほどもよまで流落られ  
たるぞと。懇まうち語へば。雞菴ハさしも黙慧  
ものおまども。今駒澤が寛仁大度小して。巴が  
舊悪と責ることぬく。刺恩として仇は報ひ。若干の  
金子と餽たるゆへ。ほとく路頭の餓字とぬるべき  
身の恰も大旱は雨と得。地獄よて世尊よ遇へる  
心地して雀躍またへど。且たのまうら駒澤が徳行  
小化せらまて。忽地は邪慳の角と折始と善心よ

翻へて。幾田金子とハいたぐまて。収領む。さまども  
巴が奸計よて。鴛鴦と區別る。醜漢子の荻野祐仙  
と阿蘇次郎は假扮て。弓之助を計較。阿蘇次郎と  
深雪が良縁とさまとげたる。不義不實とばこれ  
悔と愧て。看るく満面通紅。まをく怖とさあぐ  
ぎ。逐よその陰匿を識悔して。獸呆祐仙よハ影護  
舊債とべり。ゆへ。只得渠が托よ任せま。りく無状  
と行なひ。天道ハ善な祚し。淫は殃すとや。  
いつら車發覺。夜間ハ都門を亡命して。海西小逃  
んだ。赤馬が関よ在。從來好る戯とて。ある  
博局よ入夥とろし。且其処の稻荷街なる。妓小支

つまじい景  
巻六

一七

那といふものは、標熟色と慾と、囊金ともとべて  
蕩盡し、遂かゝる身分しまで、偃蹇とべそきと、  
乾々浄々と泄秘いひ完と。次郎左衛門まで深く  
嗟嘆とねし、于戯毒ある薬ハ、使用やうによそ  
て、結句その功も速りねしといへる。足下の奸才え  
機と臨みて、正道の事よ、役使とあるめると、何や  
低細と、閑談數刻よおよび、足下いひ、我よ先達  
とやく。山口へ下りて待居らまよ、功あらば重く賞  
とべしと、そのまゝたち別まて、但らち仰げ、空の  
かぎりの浅翠よりちかかそと、遲日の光輝融和  
と、恰好雉子の声りちし、好景いふと、うら

橋さくまを、山道の志と、うら尾のふぐりしは、もあうぬと  
ぬと詠きたまひし、御製の微妙ぬると、一時の興よ、いも  
ひ合山鳥の隔て、寐とさくうらよと、が妻雌とも  
那つろくとして、且感し、且吟し、轎子と吊せて  
閑歩ける。やがて伏水の甲明亭と、うらちをき  
母利橋の邸よ、おちほく、あや浪花の卒分堂よ  
と、迎の為ふとして、並の大座船と設ける。けりやが  
て、その舟よりち乗て、澗河と下りぬ。そまより日と  
經て、本國周防の封疆よ、入今日ふ、山口へ榮歸すれ  
いして、衆跟従も花やとて、打合せ、巳よ府下の郊  
垵まで来り、と、豈料す、看樓の裏頭よ、と、

山崎宗鑑 卷六

山崎宗鑑 卷六

十六

兵長ゆきとる武士。一隊の健卒と將て。駒澤が前  
程とふたぎ。嚴令と號はる。駒澤次郎左衛門御不審  
の儀あるより。おまより直に檢斷所へ去るべしと  
附令し。健卒等と喝して。矢袋とけく。轎子の  
前後と圍ませ。外城の御門より入り。御館の石  
と。餘軒に見ぬ。十字街頭と横とまて。檢斷御  
門に到る。駒澤次郎左衛門ハハの御門の玄關より上り  
悠々と敬廳うち進まば。とや上席ハ一族山岡玄  
番元と始し。肉食者並ひ堅と。ある中今般  
同伴せし。岩代瀑布太も先たち来りてあはける。  
冷泉帶刀為猛ハ。是よりと相良主馬と交割して。

鎌倉より下居たる。月番といひ。殊に今日の査驗  
よてあはける。昨日駒澤とハ二ねき金蘭おきども。  
公事ハ私の勞語と做とす。抽列で威儀と正し。次郎  
左衛門汝叛逆の企せるよし。顯證を以て。訴訟るもの  
あり。意旨ぬく。速く雪免めさせと。と演はける。  
次郎左衛門まを聞て。ハ不圖のことと承はるもの。  
取い。かむその覺知侍らす。列位知るおとく。小的こと  
莫大の御登庸と蒙ふ。君の御恩と重る身として。何  
為大逆罪と犯すべき。何等の黥奴らさるふと。申はし  
其奴をやく呼出させ。屹と糾明あるべしと。苦さきつ  
て回答ける。玄番元次郎左衛門と倍と睨へ。意旨分

まといはらへし誰うある。證據の東西とこそへ奪と分  
喩まは法司屬吏とも四方上下より口もろき一個白木の  
箱を拿出て駒澤が側へ開きぬ。帯刀とこそを見て次郎左  
衛門、この箱は有驗の解魔法師、伽羅羅院とつゝもの和殿  
の請、よみて、君侯と調伏せる支度るの具なると  
申せしが如何くはと語うけし。次郎左衛門冷笑ひ  
まをこそ小人よ。仇あるものども修しひたる。讒種と  
たゆめ。まの箱の上頭よ。一文字寫たる所と打ハ。下  
披る機關ふる。事占たる伎倆、夏の淺くうさよ。いひ  
嘲す。帯刀ハそのまゝ。拳頭を擧て。一文字を北と打ハ。  
撲刺粒といひらけて。中よハ一槩の草偶人の形代あり  
たる。透間もぬく。鐵釘と施得たるハ。毛髪も從身  
はり。是れり。帯刀ハこそよ。副る願書ととりあげて讀  
下せ。勿体なくも大字と呪咀殺すべきいと可怖文  
言どもよて。願主駒澤次郎左衛門と寫せり。帯刀ハ  
正視斜祖檢閱らよ。駒澤が手跡と寸分不誤ぬハ。  
志む。合粘。次郎左衛門呵々と笑て。コハ愚ぬ。帯刀主  
か。る大逆と謀るもの。ぬでう白地。たのが名氏と記  
べき。後世は偽筆などして冤訟するハ。小児の遊嬉小  
も劣る。下策傍痛し。空虚噴く。帯刀もろ。點頭  
實是。博識の譽ある駒澤。ほどのもの。あま。陳腐  
草偶人の調伏し。その人よ似つらぬ手段。まハ別。野心

と懐者ありて己が逆望と妨ぐべき駒澤なる田へかく  
寛の科と赤點黜けんとせし奸計をらんと山岡が  
斜祖にかけて寓語いふよと山岡ハ頻に眼語をれば瀑布大ハ臆  
懐裏より一個の巻軸をとり出し、次即左衛門殿よの連  
判状覺知あらん。小的豫御邊の風状不會と。一路  
上規際一が前宵目撃とるよとのありて。御邊の調  
度よとさぐり出し、よの巻軸奪取とると。熊野の烏壘  
小梵天帝釋より天神地祇と嚇らせし自筆の起請  
文よ一味の徒黨ウ血判と押たるをとり出せと次郎  
左衛門此ともとハグす、一卷と閱見て、前の願書といひ  
こまといひ、よく贖ハ贖たとも、天公も照覽あれこハ

明々ぬる偽迹ものぬると冷笑す。山岡大よ焦燥やと  
と早く黨類めらと牽出し、駒澤と對決とせよと。高  
戸より叫びたる声の下よと。健卒どもいいと枯瘦て  
色青ざりたる修験者と。まご一個の相貌兇惡なる上  
菊石痕夥しく、絶て胖大なる一軀よ豹の形と文刺せ  
し猛漢子と。高子小手よ細りて。白洲よひきととあ  
後背よハあまこの鷲固のものども。狼の如く虎の  
おとく。視張きて従とん。這の修験者伽縷羅院とハ  
山岡が手の者拘到たるよし。まご次ぬる惡棍り死し  
豹藤内と呼ものよと。渠ハ舊江劔甲賀の山奥より出  
て、こるよと忍術よ精く。此の膽略もあるゆへ、いつ草



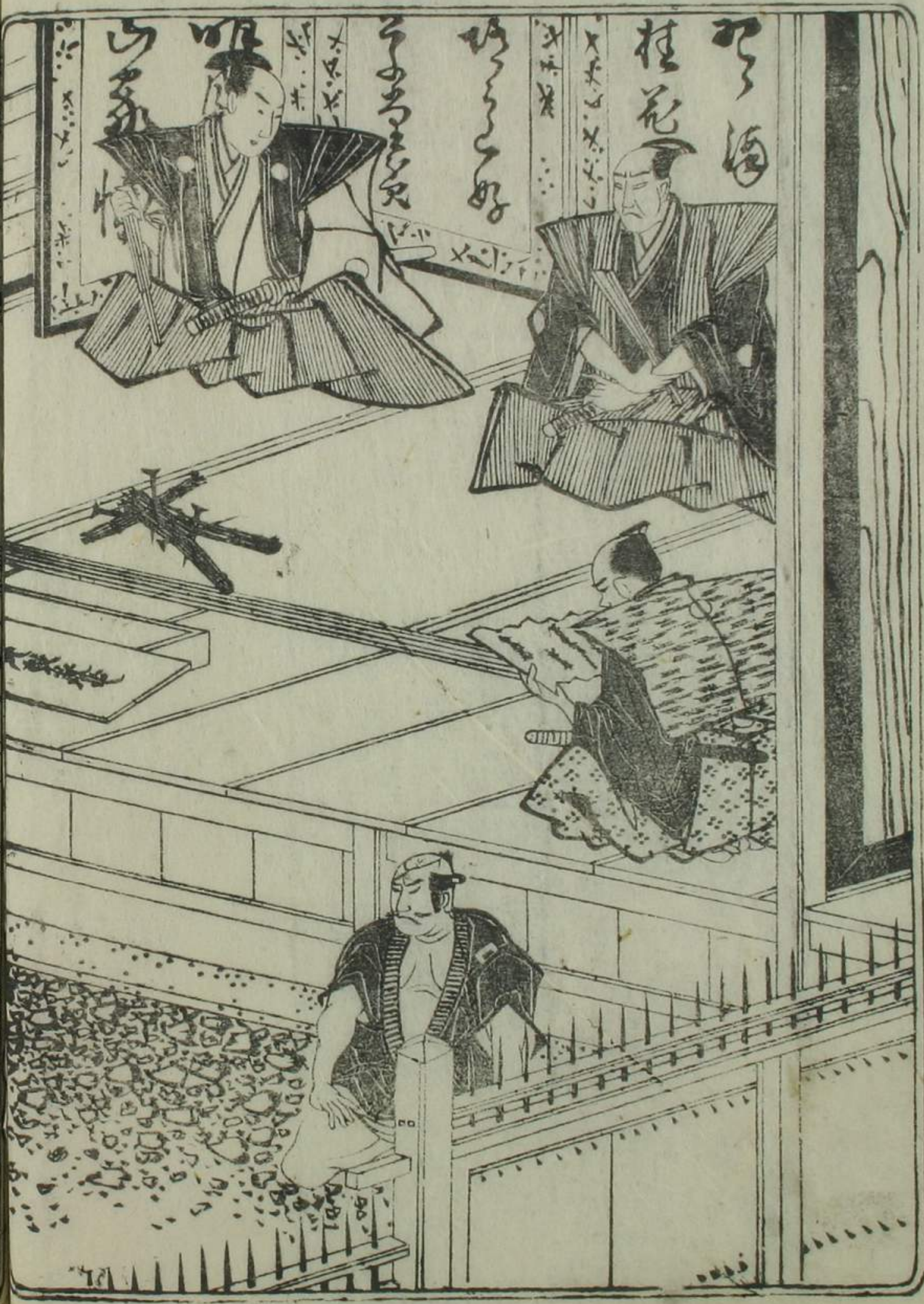
冠の頭領とぬる。江湖上は剽掠を倣して闖したれども常は賭徒と混る。あるは救火顯徒と倣す。種々と身と假粧してその踪跡とくらませしむへ。居るところごとくうぬらざればその影とたゞ捉るふとあといざし。細きごもころり粟あけぐるしぬ人。まろろよ這の豹藤内去る夕。御寶庫は閃入勘合の印と贓ととり逃去んとせし。活處しも宿直の衛士恰好照け辛うして縋る。検断所の廳は牽出せしむへ。検断吏勘察衆も相共糾明をしけるが。勘合印は垂延るからハ。這奴り分際ハあるべうらぎ。いゝさま別は當家と傾けんと謀る白者のあるは極き。とて近曾至寶の一種紛失せも

極て這奴が所為とねほゆ。何者は托きてまうせし。と厳しく拷問はまよむまぐる。初頭ハ執執抵頼已が一慮よし出とるよ。劇語たまども幾十回の責苦は湛らぬ。遂は白状して己自来駒澤が大望に與し。嚮は一種の寶貝とも偷取て逆與とき。今や勘合印と贓と取んと躲入し。總て駒澤が吩咐ぬてといへき。駒澤ハ二通の口教と逐一閱完。椽側近躑とよし。兩個の縛囚と熟祖とてヤイ。豹藤内とやらん我叛逆して。寶貝と竊ませし。かんどこの痕跡もかき諷語ぬる。從來見たることもしぬき。這面何者ふり頼も。假意擄はまとなして。生天大的冤訴と構

駒沢悪黨  
寺と對決す



○廿五



○廿六

○廿四

たるぞ、その主と申せいごとや、實事とよろせ備一  
点よても、偽るよねあてり、指一朶、けしめす、接  
遅の刑よも、行なひつべしと、嚇威けらまて、豹藤内  
ハ次即左衛門と屹と見あげ、ヤヨ、駒澤殿、ねての計較  
も、不三不四壞了、たゞ、足下が、這の修験、大内介殿  
と咒咀殺させ、重寶どもと匿しと、管領の御曹子  
と養子とし、まことも奇貨、使ひ、果ハ足下が六ヶ  
國と、押領よせん、猫も、きらぬやう、お謀らまて、斯  
脱く露顯ると、つゝ、のち、天命是非も、おきこと、已てこ  
へ、丈夫ら、まういひて、完たるよ、何、喰ぬ顔、まど、演劇  
して、あまとい、大賭の局主のやう、よも、おき、未練の拳

動よこそ、あまとい、出放題、ぬる、雑言を吐け、ハ側ふる、修  
驗伽縷羅院も、一様の口氣よて、拙僧も和殿、よ、托、し、  
國主と調伏し、驗あら、バ千金と、奥人と、約せら、し、  
丹誠を凝し、秘法と修せ、痛情くも、かく、怯面、就  
虜たる、を、微運ま、まとい、と、巧措げ、よ、つひく、始て、駒  
澤と、ハ見あぐる、み、一表、軒昂、その、顔色ハ、溫柔たる、り、沉勇  
よ、念と、含める、威嚴の、そ、ろ、凛く、お、お、えて、死、つ、も  
月下ふる、梅花の、霜よ、傲、たる、頭、勢、ま、ま、伽縷羅院、意  
駒澤と、やらん、ハ、其人、忠直、お、ま、げ、よ、お、お、ゆる、と、已、ハ、た、ぐ  
母と、養ふ、資の、ま、ま、後、先、と、り、ま、ま、る、よ、惶、あ、ら、ず、し、て  
已、よ、この、軀、と、沽、却、た、ま、バ、その、施、主、よ、た、の、ま、れ、て、只

無罪人ノ残害

無罪人ノ残害とつけたるハ二頭ハ孝養のため  
一たまど一頭ハおもはずも殺生戒と破る大や  
ぬる罪科とほくまこと殆後悔したぬバたぐら  
萎まて俯ぶきぬ。冷泉帯刀声を屬まし。駒澤は  
害せんと偽文ハ勿論。那奴等が冤誣の叙次。高の知る  
生匹夫めが好騙局。ふまといひかまといひ。揃も揃ひし  
惡黨ばらいて骨と挫ぎていせんと。喘吁声ともろとも  
。加縷羅院ハ一轉と伏て氣絶たす。ままこれ一百両の  
施主の為。自ら舌と齒切て。駒澤が雪冤をべき。口  
と滅人と死たさる。其の時や檢断の屬吏とも。帯  
刀が令ふりて。驚破豹藤内と。木馬刑を行なはん。

慌忙その支度して奔きあふ。豹藤内ことを見る。大  
駭き。擧頭て山岡は目語して止む。玄番は  
進出帯刀。嚴刑ハ止らまよ。眼下に修驗が自  
滅せし。一個の證據と失へ。豹藤内ハ靈符の尊  
像の去向と索べき。千係の者。まとい渠を責殺す。  
臍と齒の悔あらん。今日の査問ハ。ままにせらるべ  
と。つゝ。帯刀もあまの同し。尤然。倘這奴とも責殺す。  
一期駒澤が。雪冤秋ハあらと。直は健卒とも令す。  
豹藤内を牽出させ。緊く獄屋へ繋ぎ置し。帯刀又  
次郎丸衛門。對ひ。御邊の上も。御不審全く明る中ハ  
釣座と避憚あてて。逼塞めさるべし。と付令す。次郎

次郎丸衛門

次郎丸

左衛門ハふまぬ畏て隨即衛門とたち出まば後  
たる覆細轎子に乗て愴々烏衣巷の邸は目も只得  
門戸を閉ふらく慎と居たるなり。

十六回柴

さて深雪ハ喪明とまでお果て空しく朝顔の曲子と  
唱ひ東海道と吟行し不料も駒澤が本陣に呼ば  
那の曲子と唱へけるよ。次郎左衛門は一目見て原来  
我情婦深雪とてあまける。我今名と替て駒澤某と  
称せしや。舊の阿蘇次郎ふるとハゆめおもひよらで。  
とがたりは節操とたて。家とのがとて。おのころりは流落  
哀慕のあままよや。明とて泣漬とて。かくどくろ貧窶

くふまゝハ便おきまといとあまといといたり愛憐さしハや  
優りて不覺涙の墮るよ。同歌の人と憚かそ。おいたく  
更て密に遇まくおもひよひよ。差しは生憎し深雪  
ハ他處に往て出来らぬハ。いっよともせんをへれ。常  
ふ肌身とておとぬ記念の扇子よ。名と更めたる由れ  
馬副驛長に托してふまぬ留り置し。ゆへ深雪ハ  
こまよふよ。今まで他人とおもひ嫌ひ避くる駒次  
殿ハ全然こが郎阿蘇次郎ぬ。よてあまゝとつふま  
とと知。忙まどひは。風雨を胃して大井川まで戻  
ちまゝ誰とやらん。比先川沮して。郎ハとく渡り  
たまひしと聞て。ほどし。かど落し。只管くやと

歎き、ホの河沮の開まで、一夜と過おと一年よりも  
 長くおぼゆ。まさしく病つくべき辰、こをこし心は  
 雄くしくとぞおとして、日あらそ川と越精神の  
 ぎて、程と貪ぎぬ。とどろき、婉弱小艾婦ふれども、  
 一縷の情勇類く、護摩の灰も猪狼も屑とせず  
 して、不滞周防の國よ下、駒澤殿の邸、烏衣巷  
 裏よありと聞、旅の疲も出ばこそ。腫たる脚と堪卓  
 て、勃勞尋ね来て見とば、のりおーや、頼も力もまを  
 果たす。まよ、駒澤殿ハ罪ありて、閉門したまふとや、阿  
 呀この邸ハ、青竹もて斜、釘得てあるいふど、人の繫  
 話よ、たばえず、涙溢落おちて、大地ハ倒卧瘡はく声

と放ちていと位よ、かくほどに、やとら人環視して、こや  
 風狂の婦のまうも盲ふるはと、指ざりて、晒ふもおはり  
 あり、中よ、ハ又縁故了とあらわといへる者もあまぬ。  
 潔處よ、母子とねがしき、兩個の順礼、人叢と押開し、仆  
 を卧とる、狂女をバ扶け起し、埃ぬどうちしらひ、種々  
 懃ハ、何地へやらん、持ゆとける。ふの、兩個の順礼ハ、則ち  
 こも、深雪ガ乳媪、真柴ぬるもの。そまが、見子關助ふど  
 あま、如何まま、バかく、湊巧よ、小姐深雪、環會し、そこ  
 索ぬるよ、往年深雪ガ、落陵の邸と出奔せし、より、母  
 親水青ハ、號天泣地、ふげき、さうま、ひあし、いふ、うき、こま  
 真柴ハ、まを、と見よ、まの、びず、主母水青ハ、已ガ、所願、趣意

海常弱は  
却こいたる



○安九加何  
卷六

○九

○三十一

○三十一

或告僥倖とあり合る。仲間の關助と具して。主人の邸に  
たち出。西國三十三所の觀音と巡拜。あはま大悲の冥應  
ともて。今一回養君と遇せてたべと。丹敷と盡して禱はく。  
いつり三十三個の簡とうち終りりど。いさかもその験し  
あらで。ま西に向ひてぬくくも。故郷の天と赴きて。  
備後の州阿武門といへる。港澳と着けるが。あ處も名  
高き觀世音の在すよ。上と下の船人ども。ハ隨意よ  
風と祈るりまば。菩薩もやどく。孰と西孰と東と分ら  
れて躊躇たまふり。あ夕真柴ハ大悲閣と通夜な  
ぬしけるが。老眼と絞ま。いと冷き涙とと拭ひあへで。  
隻手よ珠數凡らとほ。井と額突て。日暝途遠あの

老が主家の養姐と尋出さんため遠く三十三所と  
順礼して願はまど。佛の慈悲もあらざるや。まことガ  
信心の届ざるや。今日までも環あいて。依舊空手と  
菟紫へ下り主母と遇て。何といひとけの待るべきや。  
ま何の顔もあるべき。それよりハ寧ろ。あ身と海と沈  
過世の劫と果しぬん。阿娘の前途老が後世とも救  
たまへし。頑語と獨語やがて法華經と誦し。らば直  
高欄より飛入らんと。一心の覺悟とぞさめたるる。  
登時とからぬ異香うち薫来て。錦の帷裏よ。いと  
妙なる玉音よて。老女とぞ嘆き。そ汝が誠心厚きを  
聞え。尋ぬる人よ遇せぬん。今より五日とぞ。周防



の國山口ぬる鳥衣巷とりつ取はいたるよと正しく記  
ねんほげハ夢ハあらぬ辱けぬしと真柴ハ信心  
肝ニ銘ト喜こといさるぬく今日ぬんあのとさうに  
尋ね来て深雪ニ會面けるを古恠ぬるかくて真柴ハ  
深雪と己ガ旅店ニ伴歸てふのよと詳ニかたりし  
かて井の冥護灼然まよバ前程可頼おぬしせ駒澤  
どのハ義氣ふつ後妻と逢へたまはずとさうとべるまよ  
寛の難と被て當分閉門して在すよハ巷の説ニ聞れ  
ど世のなうへふる先頃專北山雲陰ぬるハ霽てけ  
と唱ひトやうトへく程もあらで寛の陰も晴て世ニ出た  
まひふんをとまていまづ故郷ニ還るまして銀海患の保

養あらせたまへやがて駒澤殿ニ申し入團圓管嫁は  
たややうニ計較べしと多方賺ニ艶説けま深  
雪も僅々允容なる由へ真柴ハ甲斐くましくも折点ハ  
關助と役て便船とをいぬその曉天降松よ了出船を  
せし日あらざして故郷ふる路陵の邸よぞ着ふ  
ける秋月弓之助夫婦ハ悦ぶよこかきとぬく盲龜の浮  
木ニ遇優曇華の花待得たる心地してあつく真柴ガ  
勞誠とも賞しけり深雪ハ朝もく垢離と搔精身  
潔齋して只一心ニ本居菅聖廟と礼拜してあこれ  
大自在の靈應よて夫主次郎左衛門ガ災難と免こと  
させ玉へと只祈ふいのりて行時も情ざりしとぞあはむむべし

一個の貞女は不幸よして没秋水とぬき獨空房に卧す  
嘆どべー。一個の忠臣は冤の災難とかうりて戸を閉た  
るが、其の末那の忠臣貞女めてとく團圓や不團圓や次の回  
を覽て解したまひぬ。如斯の語ハ先輩已に道陳なれ共  
這半丁の閑空と嫌いて贅附とべるのよ。



朝顔日記卷之六

終

